

Ⅲ 遺 物

1 瓦 塼

1994年度の第249次調査で出土した瓦塼は、丸瓦5.3kg (55点)、平瓦8.0kg (70点) と塼 1 点である。軒瓦は出土していない。調査面積に比べて、瓦塼の数量は少ないといえる。一方、同一坪の西辺部を対象として、当研究所が1967年度に行った第46次調査では、軒丸瓦10種25点、軒平瓦 6 種47点をはじめとする多数の瓦が出土している。ここでは、左京三条一坊十四坪全体の瓦の様相を明らかにするために、両者を一括して報告することにした。なお、軒丸瓦の外縁形態や軒平瓦の顎形態の分類は、『平城宮発掘調査報告Ⅻ』によるものとする。

A 軒丸瓦 (PL. 6・7, Fig. 4)

6091A 外区内縁に珠文、外区外縁に逆時計回りの偏行唐草文をめぐらす単弁八葉蓮華文である。外縁は緩やかに内彎しながら立ち上がるが、上端には平坦面をもたない。第46次調査区から16点が出土しており、軒丸瓦全体の64%を占める。SK395に 8 点含まれるのが目を引くほか、南端付近や、北半部にも分布する。全て、別に作った丸瓦を瓦当に接合する、接合式である。端面まで縦方向の縄叩きを施した丸瓦を瓦当に接合して、内外面に粘土を足したのち、丸瓦部凸面に縦方向のナデを加える。外縁上端から 8 mm ほど下の位置に、範端痕跡が残る。瓦当厚3.4~4.1cm。瓦当裏面が平坦なものと、中くぼみになるものがある。灰白~灰黒色の軟質のものが多い。

6225A 外区内縁に圈線文、外縁に凸鋸歯文をめぐらす複弁八葉蓮華文。第46次調査区北半部の SA201近辺から、小片 1 点が出土している。瓦当と丸瓦部の製作が一体として行われ、丸瓦の接合痕跡をもたない、非接合式である。瓦当厚4.4cm。軟質で灰白色を呈する。

6225C 文様構成は6225Aと同じだが、弁端が丸みを帯びる。第46次調査区の SK395から 1 点出土。非接合式であろう。瓦当厚4.7cmで、丸瓦部に縦方向のナデを施す。軟質で灰白色を示す。

6227D 外区内縁を圈線文、外縁を素文とする複弁八葉蓮華文である。第46次調査区の南端付近で、1 点出土した。非接合式である。瓦当厚は4.4cmで、瓦当裏面を円周に沿ってヘラケズリし、中ほどがややくぼむ。軟質で灰白色を示す。

6273B 外区内縁に珠文、外縁に凸鋸歯文を配する、藤原宮式の複弁八葉蓮華文。第46次調査区中央部の SA201近辺から、外縁のごく一部の破片が 1 点出土した。硬質で青灰色を示す。

6281Ba 外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文をめぐらす、藤原宮式の複弁八葉蓮華文。第46次調査区南端の SA201東雨落溝から、1 点出土した。

6284Eb 文様の基本構成は6281型式と共通するが、中房蓮子が一重となる。従来、6282 Faとしていたが、6284 Ea の中心蓮子を大きく彫り直したもの⁽¹⁾。第46次調査区の SK395から、1 点出土している。接合式で、丸瓦部の接合は浅い。瓦当厚3.6cm。灰白色を示し、軟質である。

6304B 文様構成はほぼ同じだが、突出した中房と長い蓮弁を特徴とする。第46次調査区の SB260 西南部から、1 点出土した。接合式で、瓦当厚4.5cm。灰黒色を示し、軟質である。

6307C 間弁をもたない小型の複弁七葉蓮華文。第46次調査区中央部から 1 点出土した。

6308I やはり、外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文をおく複弁八葉蓮華文だが、間弁が独立するタイプである。第46次調査区北部から 1 点出土。接合式で、瓦当厚3.9cm。瓦当裏面は、外周をヘラケズリし、中くぼみとなる。比較的硬質で、淡青灰色を呈する。

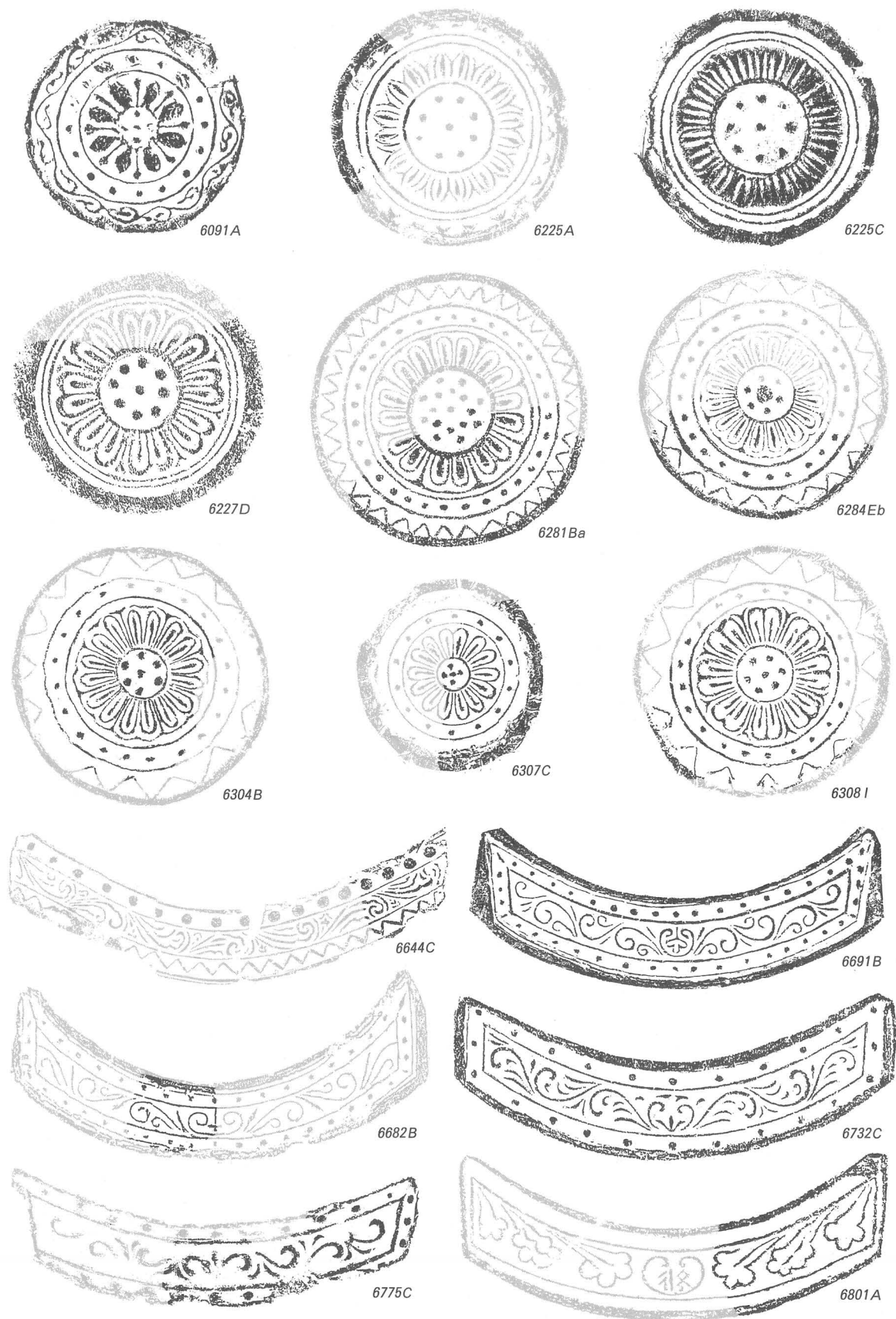


Fig. 4 軒瓦拓影 1:4

B 軒平瓦 (PL. 8, Fig. 4)

6644C 上外区に珠文、下外区に線鋸齒文を配する、右偏行の変形忍冬唐草文である。第46次調査区南端部から1点出土した。顎長6.6cmの段顎ⅠL。軟質で灰黒色を呈する。

6682B 外区に珠文をめぐらす三回反転の均整唐草文である。第46次調査区の南端、東一坊坊間東小路の東側溝SD385から、1点出土した。顎長5.0cmの段顎ⅠS。硬質で淡灰色を呈する。

6691B 外区を珠文とする四回反転の均整唐草文である。第46次調査区から33点出土しており、軒平瓦全体の70%を占める。池SG210やSA201東雨落溝、SB204西北隅柱穴をはじめとして、調査区南端部からの出土が目立つが、SK395の3点など、調査区中央部から北半部にかけても分布する。整形した瓦当面と範の形状が一致せず、瓦当の両側の下部に、範の外側の空白部を残すものが多い。顎形態は、ほとんどが曲線顎Ⅱであるが、瓦当面に対して鈍角をなす、明瞭な顎面を削り出すのが特徴的である。顎面の幅は、1.0~1.5cm。また、わずかではあるが、顎面を形成しない曲線顎Ⅰの例も存在する。平瓦部は、凹凸両面の瓦当寄りの部分に、幅広いヨコナデを施す。凸面は、縦方向の縄叩きを行ったのちに、一部横方向の縄叩きを重ねるものと、縦方向の縄叩きのみを行うものがある。6691Bには明瞭な範傷が認められ、第46次調査出土資料に関しては、範傷の進行によって、第Ⅰ~第Ⅲ段階に区分することができる (Fig. 5)。曲線顎Ⅰの資料は第Ⅰ段階に属するが、この段階にも曲線顎Ⅱの例が存在する。第Ⅱ・第Ⅲ段階の資料は、すべて曲線顎Ⅱである。平瓦部凸面の縄叩きは、縦横両方向の叩きを重ねるものと、縦方向のみのものが、いずれの段階にも認められる。したがって、こうした叩きの手法の差は、時期差には直結していない。灰白~灰黒色の軟質のものと、青灰色の硬質のものがある。

6732C 外区に粗い珠文を配する、いわゆる東大寺式の三回反転の均整唐草文である。第46次調査区から8点出土した。そのうち5点がSK395から、2点が中央部のSA201の東側からの出土である。幅の広い顎面をもつ曲線顎Ⅱ。軟質で灰黒色を呈する。

6775C 上向きの棒状弁を中央におく均整唐草文である。唐草文の反転は三回だが、四回とみることもできる。外区には珠文をめぐらす。第46次調査区北半部のSA201近辺から、1点出土した。直線顎で、凸面には縦~斜め方向のヘラケズリを施す。灰白色を示し、軟質である。

6801A 中心飾りに「修」の異体字をおき、両端から中心部に向かう、左右各三単位の飛雲文を配する。外区は素文である。第46次調査区中央部のSA201東雨落溝と調査区南端部から、それぞれ1点ずつ出土した。顎面の幅約1.5cmの曲線顎Ⅱで、顎部に板ナデまたはヘラケズリを施す。平瓦部凸面は、縦方向の縄叩きののち、瓦当寄りにヨコナデを加える。凹面は、端部のみわずかに横方向のヘラケズリを行い、瓦当近くまで布目が残る。比較的硬質で、灰黒色を呈する。

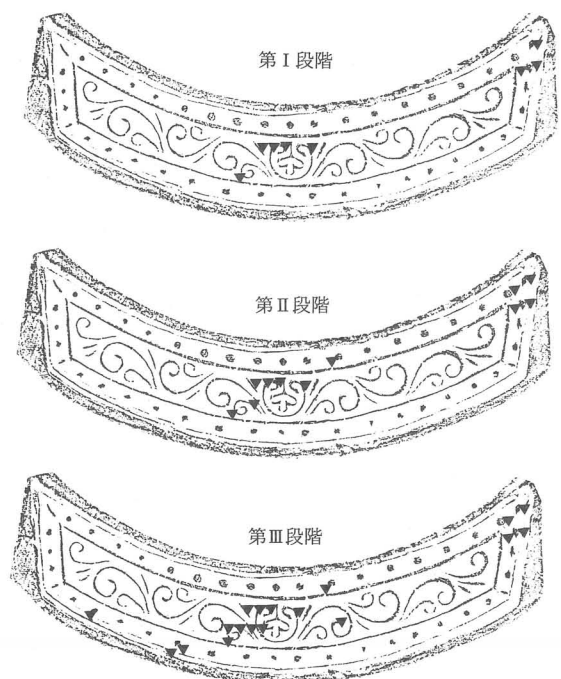


Fig. 5 軒平瓦6691Bの範傷進行

Tab. 3 軒瓦計測表

	型 式	直 径	内 区					外 区 広	外 区					全 長	外縁形 態	出 土 点 数	%
			中 房 径	蓮 子 数	弁 区 径	弁 幅	弁 数		内 縁		外 縁						
									幅	文様	幅	高	文様				
軒	6091 A	144	26	1+4	77	20	T8	33	14	S16	19	11	HK	383	三角縁	16	64.0
	6225 A	166	68	1+8	116	36	F8	25	12	K	13	8	RV26	373	傾斜縁Ⅰ	1	4.0
丸	C	155	62	1+8	111	29	F8	22	7	K	15	7	RV32		傾斜縁Ⅰ	1	4.0
	6227 D	167	58	1+8	119	31	F8	24	9	K	13	4	—		傾斜縁Ⅰ	1	4.0
瓦	6273 B	180	64	1+5+9	128	32	F8	26	13	S40	13	12	RV64		三角縁	1	4.0
	6281 Ba	184	62	1+8+8	120	29	F8	32	13	S32	19	11	LV37		三角縁	1	4.0
	6284 Eb	150	40	1+6	92	32	F8	33	20	S24	13	14	LV24	360	傾斜縁Ⅱ	1	4.0
	6304 B	172	37	1+6	102	27	F8	35	15	S20	20	11	LV16		傾斜縁Ⅱ	1	4.0
	6307 C	123	21	1+4	67	22	F7	28	10	S14	14	11	LV11		傾斜縁Ⅰ	1	4.0
	6308 I	162	38	1+6	98	26	F8	32	13	S22	19	11	LV16		傾斜縁Ⅱ	1	4.0
合 計																25	100

T—単弁 F—複弁 S—珠文 K—圈縁文 HK—偏行唐草文 LV—線鋸歯文 RV—凸鋸歯文

	型 式	瓦 当 面												全 長	顎 形 態	出 土 点 数	%
		上 弦 幅	弧 深	下 弦 幅	厚 さ	内 区 厚 さ	内 区 文 様	上 外 区 厚 さ	上 外 区 文 様	下 外 区 厚 さ	下 外 区 文 様	脇 区 幅	脇 区 文 様	外 縁 の 高 さ			
軒 平 瓦	6644C				47	13	HN	19	S17	15	LV	2	—	2	段顎ⅠL	1	2.1
	6682B				47	19	KK	14	S17	14	S17	15	S3	5	段顎ⅠS	1	2.1
	6691B	252	52	282	51	23	KK	15	S17	13	S16	31	S3	3	373 曲線顎Ⅰ	33	70.2
	6732C	305	44	307	60	30	KK	14	S 9	16	S 9	18	S3	3	397 曲線顎Ⅱ	8	17.1
	6775C				59	32	KK	12	S11	15	S11	19	S3	2	直線顎	1	2.1
	6801A	295	60	292	62	35	U	14	—	13	—	16	—	4	曲線顎Ⅱ	2	4.3
	型式不明															1	2.1
	合 計															47	100

HN—変形偏行忍冬唐草文 KK—均整唐草文 S—珠文 K—圈縁文 LV—線鋸歯文 U—雲文

脇区幅は左右の平均または一方の値

C その他の瓦塼 (PL. 9, Fig. 7)

丸瓦・平瓦 前述のように、第249次調査では、丸瓦5.3kg (55点)、平瓦8.0kg (70点) が出土した。一方、第46次調査区からは、整理袋にして150袋に及ぶ大量の丸瓦、平瓦が出土している。しかしながら、諸般の事情により、今回は、後者について十分な検討を加えるに至らなかった。ここでは、代表的なものをいくつか取り上げるにとどめる。丸瓦(1)は、全長37.8cm、玉縁長5.3cm、胴部径13.7cm、厚さ1.6cm、現存重量2.0kgである。凸面に縦方向の縄叩きを施したのち、ヨコナデを加える。平瓦(4)は、凸面全体に、離れ砂を併用した縦方向の縄叩きを行い、その後の調整を行わない。全長32.0cm、広端幅24.5cm、厚さ2.2cm、現存重量2.8kgである。平瓦(5)は、凸面に粗い格子叩きを施したのち、ヨコナデを加えるもの。平瓦(6)は、凸面に縦方向の縄叩き、凹面に模骨痕を残し、桶巻作りと考えられるものである。

埴 第249次調査区南端部の SB5636の東妻柱を抜き取った穴の中から、完形品1点が出土している(2)。31.0×16.0×6.5cm、重量5.4kgの直方体。軟質で灰白色を呈する。長辺と短辺の比が2:1に近く、それぞれ1尺と5寸を意識して製作したものであろう。

篋描瓦 第46次調査区北部の SA201近辺から、篋描瓦1点が出土している(3)。焼成前の丸瓦の凸面に、棒状の工具を用いて線を重ねたもの。青灰色を示し、硬質である。

刻印瓦 第46次調査区中央部の SK395から、「理」の刻印瓦1点が出土している(7)。『奈良国立文化財研究所基準資料V』の「理(j)」である。平瓦の凹面の狭端付近、右寄りの位置に押捺したもの。文字は、右側縁を上にした状態で正位である。

D 小 結

軒瓦6091A-6691Bの組合せ 第46次調査で出土した軒瓦の大半を占めるのは、軒丸瓦6091Aと軒平瓦6691Bである (Fig. 6)。それぞれ、軒丸瓦と軒平瓦の64.0%と70.2%を占めており、分布のうえでも、ほぼ一致した状況を示す。胎土や焼成が近似することとあわせて、これらが組み合わせることは、疑いの余地がない。一方、軒瓦以外の丸瓦・平瓦の分布については、十分に明らかにしえない部分があるが、調査区内に明確な礎石建物が存在せず、その多くは築地 SA201に伴うものと推定される。したがって、軒瓦6091A-6691Bについても、総瓦葺の屋根の軒先を飾ったと見るよりは、桧皮葺の建物の棟部分(豊棟)に用いられたと考えるのが妥当である。

この軒瓦の組合せは、今のところ、平城宮内および京内のほかの地域では確認されていない。左京三条一坊十四坪に特徴的な組合せであるといえる。一方、この北側の十五・十六坪では、出土した軒瓦のほとんどが平城宮と同範関係にあり、遺構やほかの遺物の様相とあわせて、個人の邸宅ではなく、宮外官衙と推定されている⁽²⁾。それとの比較においては、十四坪は、むしろ異なる特徴を示しているといえよう。

なお、十四坪内では、SA201近辺での軒瓦の出土量は少なく、築地に軒瓦を使用していたかどうかは疑問である。築地での軒瓦使用に否定的な知見が、他でも得られている⁽³⁾ことを勘案すれば、この場合も、築地には軒瓦を葺いていなかった可能性が高い。

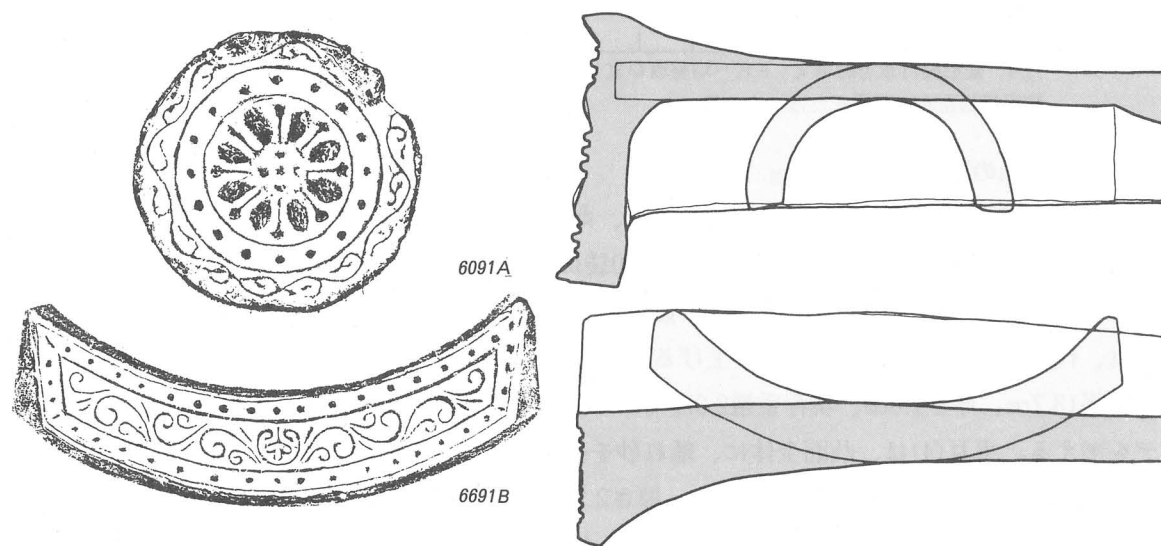


Fig. 6 軒瓦6091A-6691B 1:4

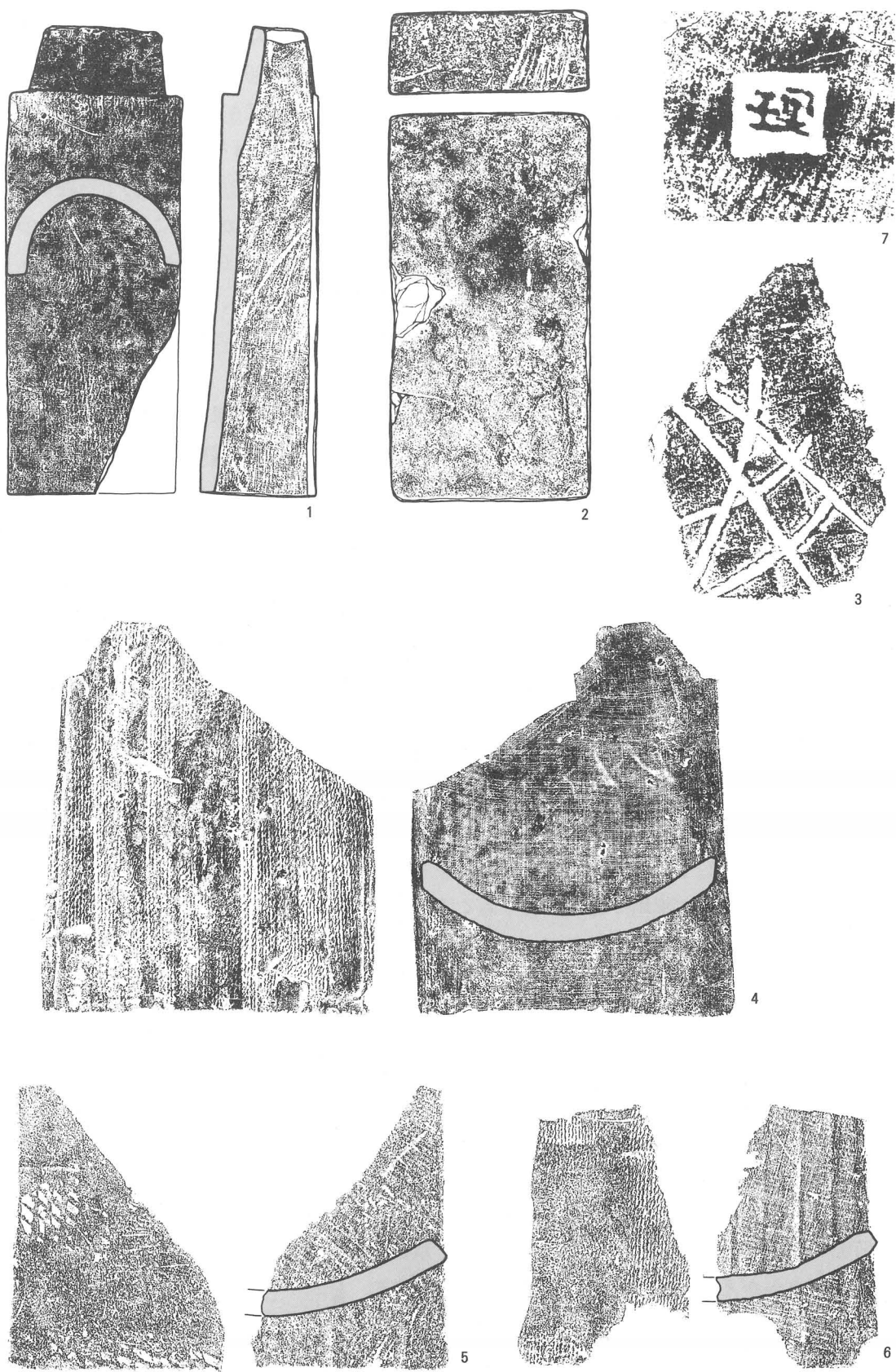


Fig. 7 瓦埴実測図・拓影 1・2・4～6-1:5 3-1:2 7-3:4

6091A-6691Bの年代観 従来、6091Aを出土する遺跡としては、ほかに大安寺が知られていた。大安寺については、天平十九年(747) 勘録の『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』の記載から、塔を除いて、伽藍がこの頃までに整っていたことがわかる。そして6091Aは、軒平瓦6717Aと組み、平城宮軒瓦編年第Ⅱ期(721-745)の後半の製作にかかるものと想定された⁽⁴⁾。

実際には、大安寺の軒瓦に占める6091Aの比率は、それほど多くはなく⁽⁵⁾、大安寺の創建にかかわる主要な軒丸瓦とみるには、やや問題が残る。しかし、平城京左京五条五坊十三坪から、最近6091A 50点がまとまって出土した⁽⁶⁾。数量および胎土・焼成の一致から、これと組み合わせる軒平瓦は、6717型式であることが確実であり、その内訳は、6717A 6点・6717B(新種) 36点・種別不明17点である。したがって、ここでは、6091A-6717Bを基本とし、補足的に6717Aが組み合わせられたと考えてよい。これらの軒平瓦の顎形態は、直線顎に近いものもいくつか認められるが、基本的に曲線顎Ⅱである⁽⁷⁾。

一方、大安寺の6717型式は、現在のところA種に限られ、B種は確認されていない。ただし、左京五条五坊十三坪と大安寺出土の6091A-6717A・Bは、胎土や焼成などの特徴が近似しており、同じ瓦屋での製作と考えられる。そして、大安寺出土の6717Aには、段顎と曲線顎Ⅱの二種類がある⁽⁸⁾。よって、6717型式の顎形態が、段顎から曲線顎Ⅱへ変化したとすれば、大安寺への供給が先行し、やや遅れて、左京五条五坊への供給が行われたと推定することができる。

曲線顎Ⅱの成立については、天平十二年(740)の恭仁宮への遷都が大きな画期となったことが指摘されている⁽⁹⁾。したがって、少なくとも左京五条五坊十三坪の6717A・Bの製作は、それに先立つことはなく、天平十七年(745)の平城還都以後とみるのが妥当である。これと組み合わせる6091Aについても、同様の年代をあてることができよう。

次に、今回の調査地である左京三条一坊十四坪出土の6091Aと、大安寺・左京五条五坊十三坪の6091Aを比較すると、前者は、後者にくらべて文様が不鮮明となり、範傷も拡大していることがわかる。時期的に遅れることは間違いない。また、前者が砂粒をほとんど含まない精良な胎土を用いているのに対して、後者の胎土には砂粒を多量に含んでいる。丸瓦部の径も後者の方が大きく、瓦当裏面はすべて平坦である。おそらく両者は、製作時期を異にするだけでなく、生産にあたった瓦屋自体も異なるのであろう。

左京三条一坊十四坪で6091Aと組み合わせる6691Bについては、平城宮を含めて、他にまとまった出土が知られていない。しかし、文様上、恭仁宮所用の6691Aに後出する要素を有すること、また、やや特徴的ながら曲線顎Ⅱの形態をとることから、少なくとも当該坪の6691Bの製作年代については、平城還都以後とみるべきであろう。

ところで、6691Bは、大和以外で、近江における出土例が知られている⁽¹⁰⁾。いずれも表採資料であるが、とくに大津市の膳所廃寺南方では、ほかに平城宮同範の6235Bと6763Aがあわせて採集されており、平城宮・京との強い関連がうかがえる。これらを含めて、平城宮・京の軒瓦の同範関係を詳細に追究した山崎信二氏は、膳所廃寺南方の資料を、宮都造営に伴う同範軒瓦と位置づけ、保良宮に関係するものであると考定した⁽¹¹⁾。

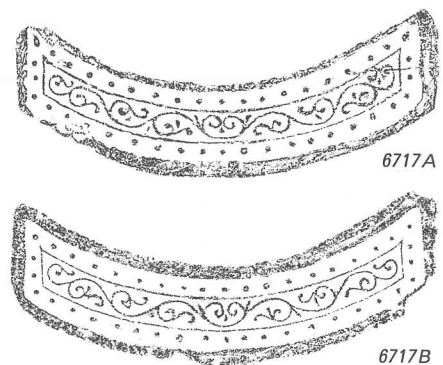


Fig. 8 軒平瓦6717A・B 1:5

保良宮は、天平宝字三年（759）に造営を開始している（『続日本紀』天平宝字三年十一月戊寅（16日）条）。また天平宝字五年（761）には、淳仁が保良宮に行幸し（同天平宝字五年十月甲子（13日）条）、造営の功に対する叙位がなされているから、この時点までには、ほぼ完成を迎えていたと考えられる。したがって、6691Bが保良宮所用瓦として製作されたとすれば、その年代は、天平宝字年間の前半に求めることができる。

この場合、6691Bの範が、大和から近江へ移動した可能性は高い。すると、左京三条一坊十四坪の6691Bの製作年代の下限は、天平宝字年間前半におくことができることになる。一方、ここで6691Bと組み合う6091Aについては、上述のように、天平十七年（745）以降の製作とみられる左京五条五坊十三坪の同範資料より、さらに製作が遅れることは間違いない。よって、左京三条一坊十四坪の6091A－6691Bについては、年代の幅をかなり限定することが可能である。また、胎土や技法において、左京五条五坊十三坪の資料との間に懸隔があり、瓦屋を異にする可能性があることを考慮すれば、製作年代が天平年間に溯ることはないと思う。すでに想定されているように、天平勝宝年間（749－757）以降の製作とみるべきであろう。したがって、保良宮造営との間に、大きな時期差は存在しない。左京三条一坊十四坪への供給品の製作後、引き続いて、6691Bの範が保良宮所用瓦の製作にふりむけられた可能性は高いのではないだろうか。

- （1）佐川正敏「平城宮の軒丸瓦6284Eと6282Fa」『奈良国立文化財研究所年報1992』1992年、p.49。
- （2）小野健吉「左京三条一坊十・十五・十六坪の調査 第230次」『1992年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1993年、pp.57－66。
- （3）小沢毅「西隆寺創建期の軒瓦」『西隆寺発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所四十周年記念学報第52冊、1993年、pp.123－136。
- （4）毛利光俊彦・花谷浩「平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」『平城宮発掘調査報告Ⅻ』1991年、pp.251－342。ただし、左京三条一坊十四坪で6691Bと組む6091Aについては、範を再用した第Ⅲ期後半（749－757）の製作とみる。
- （5）中井公「大安寺 2－大官大寺から大安寺へ」『古代寺院の移建と再建を考える』1995年、pp.24－39。内訳不明の奈良県調査分を除くと、6091Aは、軒丸瓦391点のうち、9点にすぎない。
- （6）宮崎正裕・松浦五輪美「平城京左京五条五坊十三坪の調査 第274次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』1994年、pp.78－82。
- （7）中井公・宮崎正裕両氏のご厚意により、奈良市埋蔵文化財センターにおいて、実見の機会を得た。
- （8）山本忠尚「大安寺の屋瓦」『大安寺史・史料』1984年、pp.909－934。
- （9）前掲註(4)および佐川正敏「第Ⅱ期遺構の造営瓦とその年代」『平城宮発掘調査報告Ⅻ』奈良国立文化財研究所四十周年記念学報第51冊、1993年、pp.96－117。
- （10）西田弘「膳所廃寺 付 奈良時代の古瓦出土地」「国昌寺跡」『近江の古代寺院』1989年、pp.245－259。6691B同範資料についての記述は、前者のp.249にある。また、出土地点など不明確な部分を残すが、後者のp.256第6図9も、範傷と細部にいたる文様の一致からみて、6691Bであることが確実である。
- （11）山崎信二『平城宮・京と同範の軒瓦および平城宮式軒瓦に関する基礎的考察』1994年、pp.2－4。

2 土 器

今回の調査では、土坑・柱穴等から少量の土器が出土した。いずれも奈良時代の土師器、須恵器および陶硯で、それ以外のものはない。ここでは、比較的まとまっている土坑出土の土器と、柱穴出土の土器を中心に述べる。なお、土器埋納遺構出土の土器についてはIV-2で記す。また、第46次調査でも若干量の土器が出土しているが、特に注目されるものは少ないので、陶硯を紹介するのにとどめることとする⁽¹⁾。

SK5660出土土器 (PL.10, Fig. 9-3~9) 南拡張区にある不整形な土坑から、土師器、須恵器がまとまって出土した。土師器は保存状態が不良で、手法等の観察が困難である。3は土師器碗Cで、e手法で調整する。4~9は須恵器で、全てI群土器であるが、焼成が不良で、生焼けのものが多い。4・5は杯BⅢ蓋。口縁端部がわずかに弯曲し、頂部をロクロナデで調整する。6は杯BⅢ。全面ロクロナデで調整する。7は杯AⅢ、8は皿A、9は皿B。ともに小破片であり、底部を欠失する。全面ロクロナデで調整する。これらの土器は平城宮土器Ⅲ新~Ⅳに属する。

SK5671出土土器 (PL.10, Fig. 9-12) 調査区東端近くにある小土坑で、須恵器碗Aが1点出土した。円筒形に近い器形で、口縁端部は平坦な面をなす。底部外面にロクロ削りを施し、それ以外はロクロナデで調整する。灰白色を呈し、焼成の堅緻なⅥ群土器で、美濃産であろう。

SB5630出土土器 (PL.10, Fig. 9-10・11) 掘立柱建物SB5630の西側柱の南から2間目の柱穴の柱抜き穴から、平城宮土器Ⅴに属する土師器碗AⅢ(10)、皿AⅡ(11)が出土した。ともにほぼ完形であるが、風化が著しい。碗AⅢは、c手法で調整し、口縁部外面に全面磨きを施すと思われるが、表面の風化、剥落が著しいため、不明である。皿AⅡは、c0手法で調整する。

陶 硯 (PL.10-21~25, Fig.10-21~24) 21のみが第249次調査で出土したもので、他は第46次調査の出土である。21は低圈足硯で、SB5630東底の北から1間目の柱抜き穴から出土。外堤の突帯をほとんど欠失する以外は、ほぼ完形である。陸部を一段高く表出し、周囲に低い内堤をめぐらせる有堤式である。底部の圈足は低く、貼り付けによって成形し、底部と側面にはロクロ削りを施す。陸部には磨きを施し、上面にはわずかに自然釉が降着する。この硯は底部をも硯面として使用しており、陸部とともに磨滅のために平滑となっている。類例は平城宮第一次大極殿地区SD3715⁽²⁾や左京三条二坊一坪⁽³⁾などに見られる。22は圈足円面硯。陸部と海部の境に区画を設けない無堤式で、脚部には透しを入れる。透しは14カ所に復原できるが、上端が丸くなるものもあり、全てが直線的な形態ではないのかも知れない。硯面には降灰が見られ、中央部は使用のために磨滅している。23は蹄脚円面硯。同一個体の硯部、台脚基底から図上復原した。脚柱は

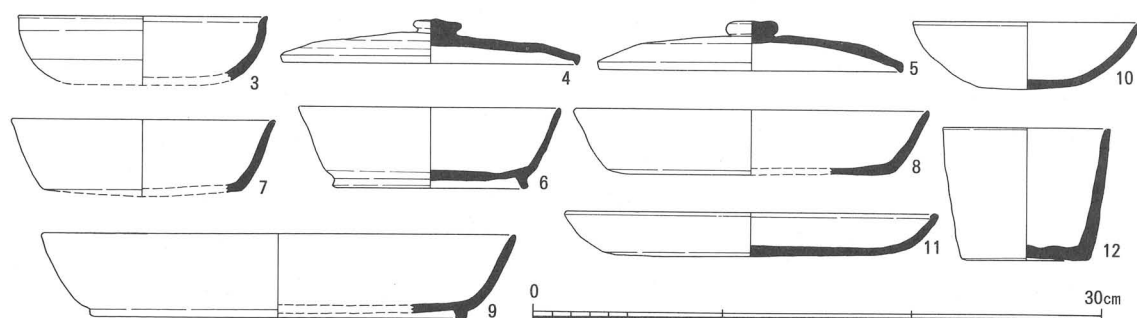


Fig. 9 土器実測図 1:4

欠失する。陸部と海部を区別する有堤式で、硯部の外面に1条の突帯をめぐらす。突帯下には球形の脚頭が付き、脚頭の下部には突帯状の脚節がある。脚頭は24個に復原でき、残存しているのは3個であるが、全て同形同大で、型作りによって成形し、貼り付けたものと見られ、脚頭の右脇には范型のあたりがある。この硯は、硯部と台脚基底を別々に成形した後、脚柱によって結合する蹄脚硯A型式で、台脚基底には脚柱を接合した後に粘土を添付して補強した痕跡が残る。側面、および台脚基底上面には降灰が見られる。24は風字硯。硯尻右端部の破片で、脚が1個残る。硯面、側縁、外堤部を削りによって整形した後に脚を貼り付け、断面九角形に面取りする。硯面にはわずかに降灰が見られ、中央部付近は磨滅している。25は圈足円面硯。外堤部と突帯、脚部上端の小破片で、口径約20cm、透しの数は20個に復原できる。有堤式であろう。

- (1) 硯の形態、各部の名称については、奈良国立文化財研究所『埋蔵文化財ニュース』41、1983年、に従った。
- (2) 奈良国立文化財研究所『埋蔵文化財ニュース』41、1983年。
- (3) 奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊・三条二坊―長屋王邸・藤原麻呂邸―発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第54冊、近刊予定。

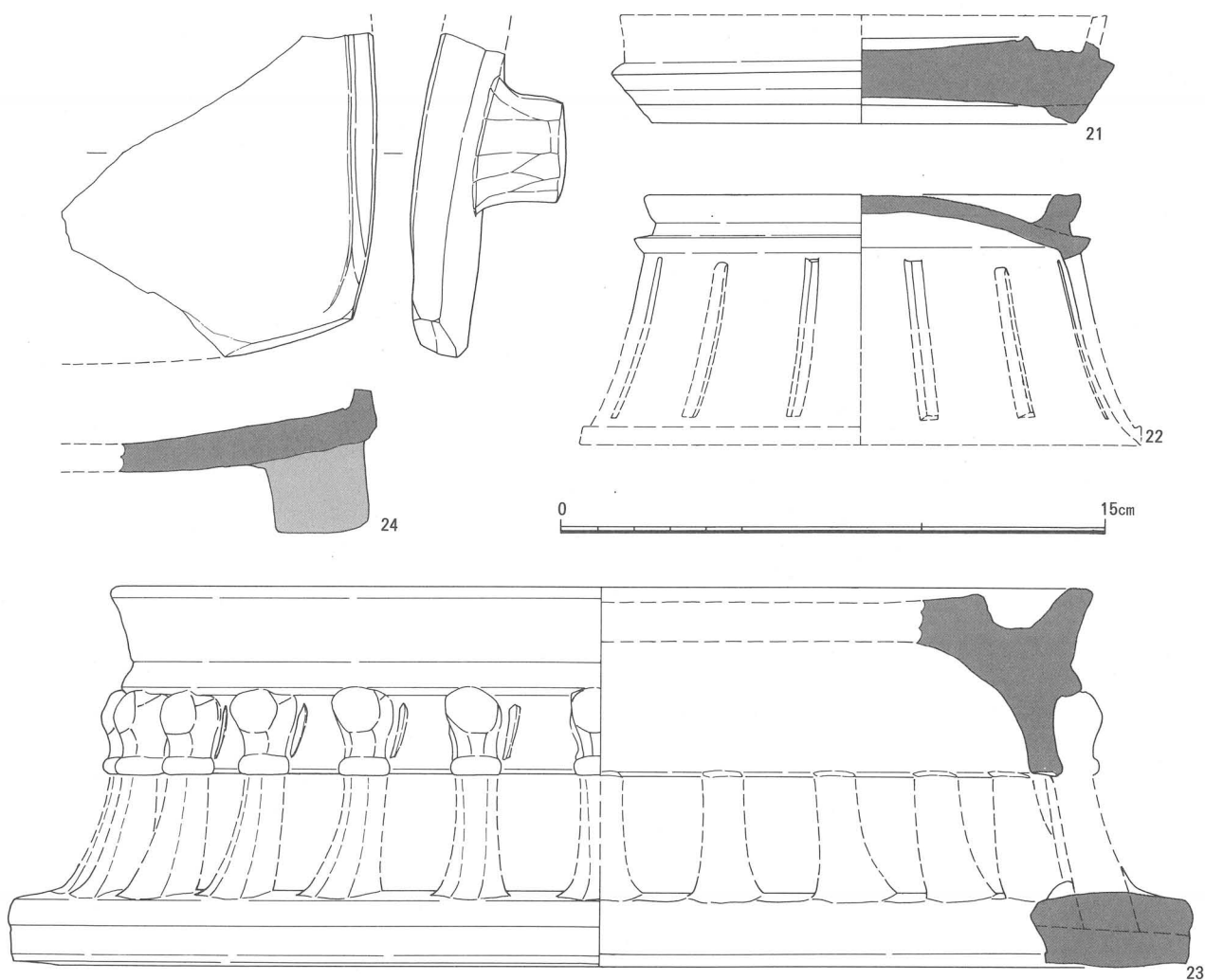


Fig.10 陶硯実測図 1:2

3 金属製品・土製品他

金属製品・土製品等の出土は少なく、主として土坑SK5645から出土した鑄造関係遺物の他は、掘立柱塀SA5641・5642の交点にあたる柱掘形から出土した鉄釘2本と銭貨があるにすぎない。

A 金属製品

鉄 釘 (PL.11-9, Fig.11) ほぼ同形同大の方頭釘で、2点とも先端を欠損する。1は、頭部径1.5×1.5cm、現存長3.9cm。脚部もほぼ方形で、基部径は1.0×1.1cm。現存重量7.8g。2は、頭部径1.3×1.4cm、現存長3.5cm、脚部基部径1.0×1.1cm、現存重量6.6g。

銭 貨 (PL.11-1~8) 皇朝十二銭の最後、天徳2年(958)初鑄の乾元大寶が、破片を含め8枚出土した。鑄上がりはよくなく、銭文も不明瞭なものが多い。直径は計測しうるもので、1.85~2.0cm、重量は1.85~2.55gとばらつきがある。

B 鑄造関係遺物 (PL.11-13)

鑄造関係の遺物として炉壁・壁体合わせて約3.4kg、鋳滓約0.7kgが出土した。この他、第46次調査区では、やや小型の鑄羽口1点、土坑SK5645からは、大型の鑄羽口片が出土している。炉壁・壁体の断片と共伴した大型の鑄羽口の破片の存在から、いわゆる甑炉と呼ばれる大型溶解炉があったと推定される。鑄羽口片や鋳滓等の蛍光X線分析の結果では、鉄と銅が顕著に検出され、また、鉛も含まれている。銅の製錬、あるいは鑄造と関係するものと考えられる。さらに、少量ではあるが、鑄型と考えられる破片もあるので、敷地内の一画で、大型の銅製品の鑄造が行われていたと推定される。

C 乾元大寶の材質

蛍光X線法による乾元大寶の非破壊分析の結果をTab.4に示す。これまでも皇朝十二銭は、時代が下がるにつれて錫の量が減り、鉛が増える傾向にあることは指摘されていたが、鉛が90%を越える大変高い値を示した。材質確認のため、断片No.8の表面を削り、地金を表出し、微小部蛍光X線分析装置で分析すると、鉛約75%、銅約20%、砒素約2%、その他鉄、銀などが含まれていることがわかった。甲賀宜政の分析⁽¹⁾では、乾元大寶に含まれる鉛は、25~75%とかなりばらついている。当時の鑄銭の材質は、完全に規格化されておらず、No.8の分析値もその一例である。この値が他の資料の成分を代表しているとはいいがたい。

(1) 甲賀宜政「古銭分析表」『考古学雑誌』第9巻第7号、1918年、PP.35-52。

Tab.4 乾元大寶の蛍光X線分析(非破壊法による)

試料No.	Pb	As	Ag	Cu	Fe	Bi
No.1	95	1.4	0.61	3.0	0.51	
No.2	88	3.7	0.62	3.2	3.70	1.2
No.3	92	3.6	0.73	3.0	0.58	
No.4	94	2.0	0.66	3.2	0.46	
No.5	93	2.8	0.36	2.9	0.61	
No.6	93	2.6	0.48	3.1	0.69	
No.7	93	2.4	0.69	2.8		
No.8	94	1.1	5.10		1.50	

試料No.8は小断片

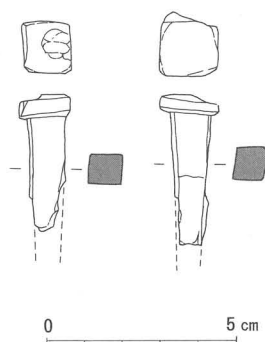


Fig.11 鉄釘実測図